福島市観光案内所

vol.7

ふくる通信

The Fukushima tourist information center communication

小特集 福島の開拓者 ～大島要三～

発行／福島市観光案内所
〒960-8031 福島県福島市栄町1-1
TEL 024-531-6428
FAX 024-531-8165
URL http://www.f-kankou.jp
こらんしょふくしま 検索
E-mail kankou@f-kankou.jp

「大島要三翁の足跡」より転載

福島の開拓者 ～大島要三～

太平の時代が永く続いた江戸時代から明治に移り、福島では福島藩（板倉藩）から福島町、そして福島市に変わりました。

大正、昭和の時代を経て、平成の現代に移ろいゆくなかで、多くの先人たちがいまの福島を作り上げてこられました。

今号では、鉄道、電力、産業、政治、経済など、それこそ多方面にわたり、その力をもって福島の礎を築かれた大島要三を取り上げるものです。

大島要三は、河野広中（※ふくる通信vol.6特集）をして「福島には大島という義侠の人がおる」と言わしめたほど、義理固く、人格者でありました。また、問題の紛糾などが起きたとき、それをまとめる天稟の手腕は他に比すべき者がいないほどで、福島にとってなくてはならない存在だったといいます。

さらに、会津武士出身で人望も厚く、福島商業会議所初代会頭を務めた福島農工銀行頭取・加藤寛六郎は、早くから大島の才能を見抜いており、「今のように政党に関係したり、土木事業などをやっておる者は浮調子な者が多いが、大島君は珍しくできた人物である。石垣を積むように、一つ一つ健実に歩いて行く人で、こんな人なら安心して交際してもよい。」と評価しておりました。

大島要三の生い立ちやその経歴は次頁以降に譲るものの、彼が大きく関わった2つのトピックとして、平成29年に創立100周年を迎える「福島商工会議所」と、平成30年に開設100周年を迎える東北唯一の日本中央競馬会所管「福島競馬場」を軸に、大島要三がいかに福島に関わってきたか、そして大島要三から見える当時の福島市を紹介させていただきます。

©JRA

「ふくる」とは…「福島に来る」と「福が来る」を掛け合わせた言葉です。福島市にお越しくださった皆さまに「福」が「来る」事を祈るとともに、福島市の魅力をたくさん知っていただきたいと願います。

※当発行物は敬称を省略させて頂いております。

大島要三・年表

年代	数え年	できごと
1859（安政 6）年	1歳	2月15日埼玉県北埼玉郡で生まれる
1870（明治 3）年	11歳	寺子屋堀江塾に通う
1876（明治 9）年	18歳	長谷川きそと結婚
1882（明治15）年	24歳	東京－青森間の鉄道敷設工事開始
1884（明治17）年	26歳	共同競馬会社（上野）の馬場造成工事を請負う
1885（明治18）年	27歳	岩崎弥太郎の墓所工事に従事 東北本線鉄道工事に従事
1886（明治19）年	28歳	出世の基となる宇都宮－白河間、白河－福島間の鉄道工事着手（初の福島入り）
1887（明治20）年	29歳	金谷川隧道起工 箱根山中東海道本線鉄道敷設工事着手
1889（明治22）年	31歳	剣客「榊原鍵吉」との交流始まる
1891（明治24）年	33歳	福島町に転居
1893（明治26）年	35歳	父隠居により大島家家督相続
1894（明治27）年	36歳	奥羽線福島－米沢間の庭坂までの工事を請負う
1896（明治29）年	38歳	奥羽南線土木請負業の組合長になる
1900（明治33）年	42歳	福島稲荷神社の大鳥居起工 福島県知事より県会議事堂建築工事への感謝状授与
1903（明治36）年	45歳	京釜鉄道速成工事のため韓国に渡る
1904（明治37）年	46歳	福島町会議員になる
1905（明治38）年	47歳	福島電灯（株）監査役に就任 会津電力（株）取締役会長に就任 韓国から帰国後、本籍地を北埼玉郡から福島の杉妻町に転籍する 本名を要蔵から要三に改める
1907（明治40）年	49歳	福島市会議員当選 福島羽二重（株）創立発起人となり、監査役就任 福島誠壱（株）創立に関わり、取締役就任 信達軌道（株）創立・取締役就任 日東紡績（株）や蚕業試験場の設置に尽力
1908（明治41）年	50歳	東北六県連合共進会開催への尽力により福島県知事より感謝状授与 福島県土木請負業者組合長になる
1909（明治42）年	51歳	来福の伊藤博文より「世事有千変 人生無百年」の揮毫授与
1910（明治43）年	52歳	奥羽本線庭坂－赤岩間線路変更工事着手
1911（明治44）年	53歳	福島瓦斯（株）を創設し社長となる 福島電燈（株）社長就任
1913（大正 2）年	55歳	福島市会議員当選 福島酒造（株）を設立し取締役社長に就任
1914（大正 3）年	56歳	白棚鉄道（株）を創立し取締役社長に就任 福島商業銀行監査役に就任
1915（大正 4）年	57歳	大島家墓所を信夫山に築造
1917（大正 6）年	59歳	福島印刷（株）を設立し社長就任 福島瓦斯（株）を福島電燈（株）に合併 福島民友新聞社社長に就任 福島市会議員に当選
1918（大正 7）年	60歳	**（社）福島競馬倶楽部認可、会頭に就任** 刈田水力発電（株）を設立し福島電燈に合併
1919（大正 8）年	61歳	**福島商業会議所二代会頭に就任** （株）東京米穀商品取引所監査役に就任
1920（大正 9）年	62歳	福島電燈（株）に奥羽電気（株）、東洋化学工業（株）、米澤電気（株）、磐城水力電気（株）を合併
1921（大正10）年	63歳	福島電燈（株）社長を辞任 福島商業会議所会頭任期満了により辞任
1922（大正11）年	64歳	会津電力（株）社長辞任 福島民友新聞社社長辞任
1924（大正13）年	66歳	大島要三念願の競馬法制定 衆議院議員に当選（立憲憲政会）
1928（昭和 3）年	70歳	衆議院議員任期満了 馬産振興の功により農林大臣功労賞授与
1929（昭和 4）年	71歳	福島商工会議所六代会頭に就任 （※昭和3年商工会議所法施行により改称）
1930（昭和 5）年	72歳	衆議院議員に当選（立憲民政党）
1931（昭和 6）年	73歳	福島市から功労者表彰授与
1932（昭和 7）年	74歳	3月23日胃がんのため死亡（東京南胃腸病院にて） 信夫山の墓所に眠る

【参考図書】「大島要三翁の足跡」高野狐鹿編　「福島競馬の弐拾年」太田源次朗著　「ふくしまわが町」木村三良著
「福島商工会議所50年史」　「福島馬主協会50年史」　「福島ガス七十年史」

若き日の大島要三　「大島要三翁の足跡」より転載

自宅の庭園にて　「大島要三翁の足跡」より転載

編集後記

- 福島市民の中でも決してメジャーではない大島要三。しかし、彼の足跡を辿ると福島市に多大な貢献をしてきたことが伺えます。以前特集した河野広中との関わりなど、時代背景も勉強になりました。この特集を通じて大島要三と福島市の発展を、広く知っていただく機会になればと思います。（円盤餃子大好きっこK）
- 福島市の経済発展の礎を築いた大島要三ですが、その功績を知っている方は少ないのではないでしょうか。私もその一人でぼんやりとしか知りませんでした。大島なくして福島市の発展は語れません！大島要三の功績を多くの方に知っていただければ嬉しいです。（福島のモモが大好きA）
- 大島要三に関しては「名前だけは聞いた事がある」という程度の知識しかありませんでした。しかし資料を読み進めるうちに、手腕や人望はもちろん、老いてもなお福島市発展のために尽力し続ける姿に感動しました。大島要三は「もっと周知されるべき」とも思いました。このふくる通信を少しでも多くの皆様にご覧いただきたいと思います。（良い人生には花と酒の幸）
- 恥ずかしい話ですが、今回のふくる通信のお題をお聞きするまで大島要三と言う名前すら知りませんでした。けれど現在の福島市の発展になくてはならない人、そして忘れてはならない人だと言うことが良くわかりました。土木関係の仕事をしている知人にも読ませてあげたいです。（元気な福島が好きですH）

大島要三 ゆかりの地MAP

❶ 大島要三の銅像と信夫山公園の碑

福島市の発展に尽力した大島要三を讃え昭和12年に信夫山公園に銅像が建設されました。しかし、戦争が激しくなった昭和18年、金属類回収令により銅像が国へ提出されてしまいました。戦後、昭和39年に再建。福島競馬場の方を向き、眼下に福島市街地を見下ろす大島の銅像は福島市の発展を見守り続けています。銅像の傍らには長大な信夫山の碑が建っており、戦時中に銅像を応召した経緯や信夫山公園が官有地から市有地へ所管が移ったのは大島の遺徳によるものであったことが記されています。

❷ JRA福島競馬場

公認競馬を誘致した福島倶楽部が使用する競馬場として建設されました。大正7年6月に初めての競馬を開催。現在、福島競馬場は東北唯一の中央競馬として春・夏・秋と年3回競馬が開催されています。福島競馬場で行われる特別レースには自然豊かな福島県内の名所や地名に因んだレース名がつけられています。（吾妻小富士賞、雪うさぎ賞、花見山特別、信夫山特別、安達太良ステークス、フルーツラインカップなど）

❸ 福島稲荷神社

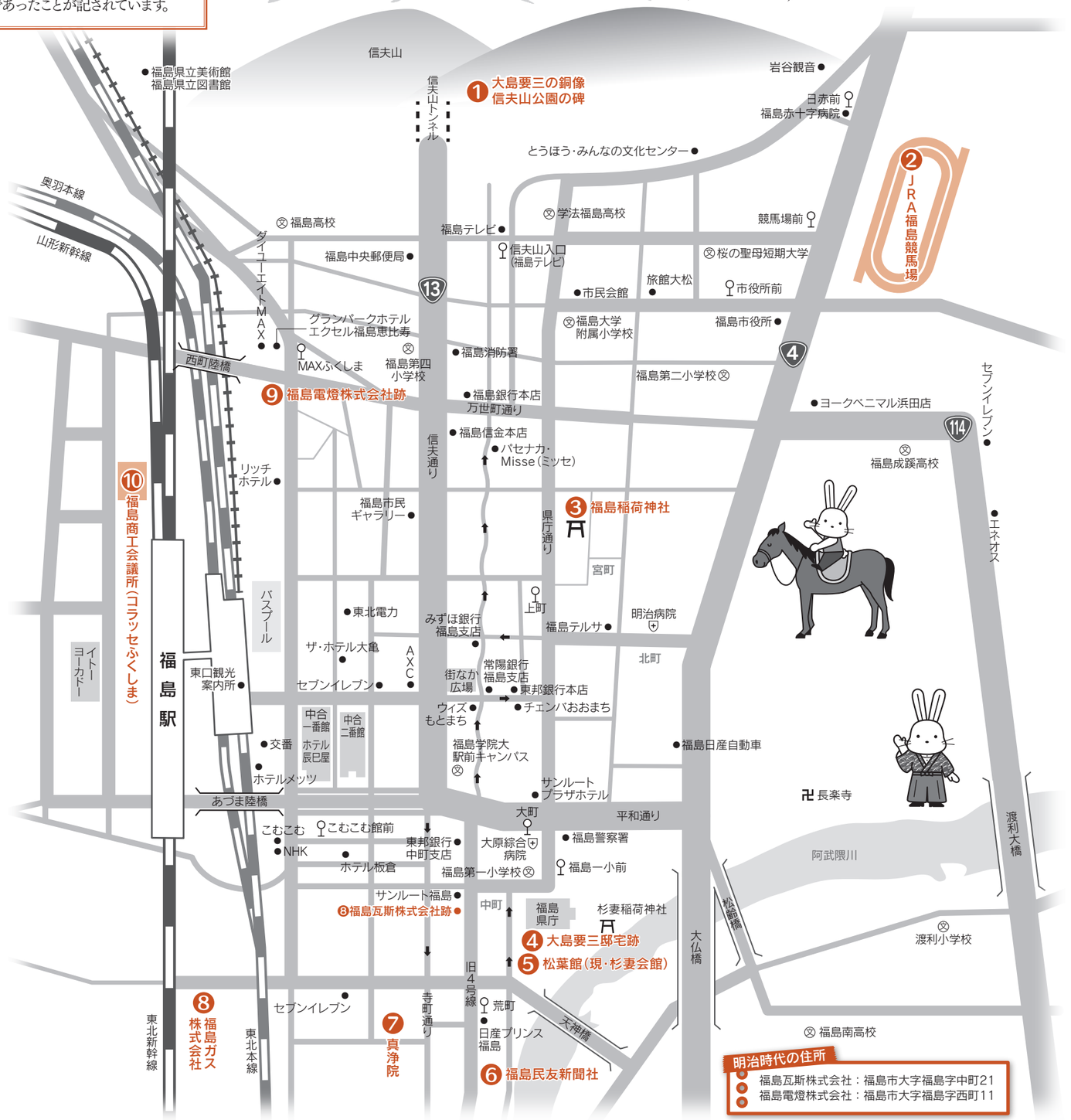
平安時代、陰陽師安倍清明により建立されたと言われています。稲荷神社の境内では古くから歳の市が行われていましたが、明治42年暮れ、大島らが年末の贈答品や必需品を売り出したことがきっかけとなり、「歳の市」が行われるようになりました。上町から入る表参道にはイルミネーションを灯し、市民の関心を大きく引くこととなりました。また、大島は稲荷神社の大鳥居も建設していますが、当時の鳥居は現存はしていません。

❹ 大島要三邸宅跡

旧板倉藩の福島城本丸跡である福島県庁西隣に面積が1650坪という広大な敷地にかつて大島要三邸が建っていました。庭園は遠く京都から資材を運び、大島好みに造成されていました。長男が生まれた時のエピソードとして当時、地方では見ることができなかった「鯉のぼり」をあげていたと言われています。現在は大島が好んだ庭の一部がひっそりと残っています。

❺ 松葉館（現・杉妻会館）

明治15年、県令として着任した三島通庸が料亭兼宿泊施設として建設しました。大島邸とは目と鼻の先という距離でした。競馬法制定を目指す大島は福島に貴族院議員の視察団を招いて歓迎会を開いています。現在は杉妻会館が建っており、会議・宿泊施設として利用されています。



❻ 福島民友新聞社

大島は福島印刷会社を設立し印刷業を営んでいましたが、業績が思うようにあがらず困窮していました。そこで、福島民友新聞社と大正6年4月に合併し、社長に就任しました。器量の大きかった大島は、細かいことには干渉しない主義でしたが、新聞には必ず目を通し出来栄えを確認していました。「報道はあくまで事実を主としてありのままを正しくしなければならぬ」と公明正大な考えを常に持っていました。

❼ 真浄院

昭和7年3月大島は病気によりこの世を去りました。福島市公会堂で葬儀がしめやかに執り行われ、導師として読経したのが真浄院住職綱代智明師でした。妻きその葬儀も真浄院で執り行われています。真浄院には15代将軍徳川慶喜の曽祖父一橋慶昌の墓が上野寛永寺から戦後移されています。

❽ 福島ガス株式会社

福島瓦斯製造所

現・福島ガス

明治44年3月福島瓦斯（がす）株式会社が設立され大島が初代社長を務めました。事業の競争を避けるため大正6年福島電燈株式会社に合併され、電気は灯り用、ガスが燃料と供給する目的が分けられました。しかし、昭和15年3月、再び分離し独立。矢剣町に建設した瓦斯製造所が発展し現在の本社となっていますが、明治時代は中町に本社がありました。

❾ 福島電燈株式会社跡

明治28年に福島電燈株式会社が設立され、福島に電気の供給が始まると、多くの株式や合資などの商業系の会社が誕生しました。大島は大正3年6月に社長に就任。工場から街灯の配線工事の依頼を部下が受けましたが、採算がとれないことを理由に、電柱にランプをつけさせたことがありました。これに対し大島は「公衆の問題だ。たとえ会社はみすみす損をすることがわかっていても利害得失を離れ公益のために積極的にでなければならない」と叱りつけたエピソードが残っています。現在、事業は東北電力へ受け継がれていますが、かつてこの場所に会社が建っており、福島市経済発展の礎を築きました。

❿ 福島商工会議所（コラッセふくしま）

大正6年7月に設立。福島県内では1番目に、東北では5番目、全国では66番目に誕生した歴史ある商工会議所で、平成29年に100周年を迎えます。商工会議所が入るコラッセふくしまには福島県観光物産館が併設されています。4年連続全国新酒鑑評会金賞を受賞している福島県自慢の日本酒のほか、民工芸などの県内の特産品が一堂に揃っています。

- 福島県観光物産館
  営業時間：10時～19時。年中無休。（臨時休業あり）

福島商工会議所 渡邊博美会頭にインタビュー

昭和21年生まれ　福島市出身。
昭和45年3月福島ヤクルト販売㈱入社
平成12年3月同社代表取締役社長就任、平成25年11月福島商工会議所会頭就任、平成26年5月同社代表取締役会長就任。

若年の頃、お仕事で宮城県にいたこともあるそうですが、福島市に長く暮らされている渡邊会頭は、県内の商工会議所をまとめる福島県商工会議所連合会の会長も務めていらっしゃいます。

Q 福島商工会議所設立の立役者の一人である大島要三氏について教えてください

福島の土木・建設業界の中では「神様」みたいな、圧倒的な人だったと聞いております。大島さんの屋敷は、福島市の杉妻町にありましたが、降雪時などは、大島さんと一緒に仕事をしたことがある人たちが、屋敷のまわりの雪を掃いたエピソードがあるくらい。これは大島さんと一緒に仕事をしたことがある私の祖父から聞いた話です。大島さんは政治家でもありましたが、実業家として皆に好かれていました。競馬場を福島に設立しようと奮闘したり、堅物というよりは人間的に面白味のある人だったと思います。

Q 会頭から見た福島の印象を教えてください

福島市は東京や仙台などの大都市圏に比べれば、文化的施設や娯楽が少なく物足りないと若いうちは思ってしまいがちです。しかし、福島市は山や川などの自然が豊かで、人は穏やかで親切、居心地がよく、かけがえのない場所だと思うのです。特に福島の魅力はその人柄にあります。

Q 福島市（地元）と商工会議所の関わりについてはどうお考えですか？

商工会議所とは「日本の企業と地域を元気にしたい」と願う民意の結晶から生まれた経済団体で、国や自治体でつくられた団体ではありません。行政は教育や生活といった最低限のことは保証していますが、商工会議所は行政ではカバーできない事柄や、イベント・まつりなどの経済発展を通して、市民の暮らしのレベル向上に貢献していく組織だと思っています。行政ができにくいことを商工会議所が担い、お互いに地域に密着し関わっていきたいです。

Q 福島商工会議所の会員はどれくらいですか？

全国には515の商工会議所があります。福島商工会議所の会員数は4000会員を突破しました。福島市の中小企業の約4割が福島商工会議所に登録しております。4割という数字は全国的に見ても多いのです。会員の皆様に対して、大都市圏ではできないきめ細やかなケアができることが強みです。

Q 力強い将来ビジョンをお持ちの会頭に「座右の銘」をうかがいます

その時々で変わることもありますが「凡事徹底」です。当たり前のことを疎かにしないで徹底的に行うということ。仕事も慣れてくると要領がよくなって、つい「こなして」しまいます。仕事は「こなす」ではなく、深く探って、どうしたらもっと良くなるだろうと「取り組む」ことが大切だと思っています。

Q 会頭に就任してから一番印象に残っていることは？

就任してからは3年ですが、やはり5年前の東日本大震災です。震災からの復旧は、いばらの道でした。ですが、福島の夏の風物詩である「わらじまつり」や福島市をはじめとする近隣の自治体と協力して開催した「山車フェスタ」など、賑やかなイベントを通じて、他の地域から訪れた人々に「福島すごい！」と評価していただいたとき、とてつもない喜びを感じました。また、震災後は、日本商工会議所の全国会議も福島市で開催されています。日本経済界のトップの人たちが福島を応援し、お力添えしてくれていることが嬉しいです。

Q 2017年に福島商工会議所は100周年を迎えます。抱負・展望を教えてください

100周年を迎えるにあたり、基本コンセプトを「地域と会員事業所の足腰を強く丈夫に！」、キャッチフレーズを「ふるさとの元気を支えて1世紀。」としました。人口減少や高齢化などが進み、事業継承が中小企業の問題となっています。震災による風評被害からの脱却も図らなければなりません。節目の年にプライドを持って、地域経済のリーダー的存在として福島市の経済を牽引していきたい。私たちは福島再生を一歩ずつ進めるべく、県、市、各地商工会議所、各種団体などの連携により「オール福島」で取り組み、「福島再生への挑戦」に取り組んでいきます。
また、平成30年に100周年を迎える福島競馬場とのコラボ企画や、毎年開催している山車フェスタも近隣自治体と協力して、よりパワーアップして開催したいと思っています。そして、ふくしまの復興と、元気・誇りを世界に発信するために、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの新国立競技場にふたたび「オリンピックマーチ」を鳴り響かせたいという機運を日本全国で高めるべく、2020年4月からのNHK朝の連続テレビ小説を古関裕而物語放映の実現を要望する署名活動も行っています。

ふるさとの元気を支えて1世紀。

平成29年 100th Anniversary

おかげさまで　平成29年
福島商工会議所　創立100周年。

福島商工会議所と大島要三

大島要三の生い立ちと福島

大島要三は安政6年（1859）埼玉県北埼玉郡大桑村川口（現・加須市）に、6人姉弟の長男として生まれました。大島は「幼い時から富士山を見て、自分も人の中の富士山になろうと心に誓ったことがある」と述懐しているように、非凡な才能をのちに福島で開花させます。大島家は土木に従事しており、土木修行によりきびしい仕込みをうけ、さらに恵まれた体躯に剛力が加わった要三は群を抜いた腕を持っていました。明治18年27歳のとき、岩崎弥太郎の墓所工事に従事したのち、東北本線の工事に専念し、いよいよ福島の土を踏むことになります。大島は東海道本線や奥羽線、さらに韓国の京釜鉄道敷設にも携わり大を成し、韓国より帰った明治38年4月28日に、本籍を埼玉県より福島県信夫郡福島町福島字杉妻町8番地（現・福島市）に移しました。その後、福島電灯株式会社監査役や会津電力株式会社取締役会長に就任、福島県蚕糸業界振興のため福島羽二重株式会社の監査役に就任したり、福島誠壱株式会社創立に力を注ぎ取締役となりました。また信達軌道株式会社が創立され取締役に就任するなど、福島になくてはならない存在となっていきました。

商工会議所の発祥

日本の商工会議所の歩みは、明治10年（1877）東京に設立されたのが始まりです。第一国立銀行や東京証券取引所といった企業を設立・経営し「日本資本主義の父」と言われた渋沢栄一が農商務省に申請し、許可されて商法会議所が設立されました。翌11年には、福島県桑折町にある半田銀山など多くの鉱山を経営し「鉱山王」と呼ばれた五代友厚が大阪商工会議所を設立、こののちぞくぞくと申請され、全国主要都市に設立されていきました。

福島の近代工業化と商業会議所設立の気運

福島の主要産業であった養蚕業は、近代工業の導入に消極的であり、大正期に入ってもいぜん工業化は停滞、近代化の波に乗り遅れた福島地方の養蚕業は衰退していきます。明治40年（1907）福島に待望の市政が布かれました。そこで明治30年頃から商工会議所の設立機運が高まり、商工会議所の前身ともいえる福島商業倶楽部が結成されました。大正に入り、財界の動向に対応し福島市の繁栄を図る一端を担うため、当時の日本銀行福島支店長だった林養三が、大島要三ら市内の有力者に福島商業会議所設立を働きかけ、大島は会議所設立へ尽力していきます。当時、大島と旧知の仲で東京高等商業学校の佐野善作校長の熱心な進言も大きな推進力になりました。大正4年（1915）6月2日に、林の提唱により開かれた福島商業会議所設立に関する協議会は、大島らの努力が功を奏して、念願の商業会議所設立を決定しました。こうして農商務大臣で福島の自由民権運動の中心人物であり福島県議会議長も務めた河野広中に、福島市長を経由して申請書を提出しましたが、却下されてしまいます。なぜなら当時の福島市の商工業の実情は老巧ではなかったからです。福島市の商業の中心をなすものは養蚕業であり、数少ない鉄工業や製紙業などは、その補助産業でしかありませんでした。そこで数度の訂正と申請を行って、大正6年7月28日ついに正式に許可されるに至りました。

商業会議所二代会頭の時代

福島商業会議所の初代会頭は会津藩士で明治時代の地方官吏であり福島県農工銀行頭取であった加藤寛六郎でしたが、加藤が病気を理由に辞任したため、会議所設立の事実上の立役者であり、実業界の有力者であった大島が大正8年9月に二代会頭に就任しました。ところが大正9年3月をさかいに、第一次世界大戦の好景気の反動が押し寄せ、輸出品の大半を占めていた蚕糸は急激に値を下げてしまいます。それは主産地である福島市の景気にも大きな影響を与えました。そのためしばらくは、この不況に対する対策が大島の主な目的でした。しかし大正9年3月15日に株式相場は急激な暴落をとげ、政府の救済措置空しく戦後景気に終焉が訪れました。大島はこのような危機を打開するため臨時総会を開き養蚕家の保護を強く政府に要望しました。また大島は、自身が取締役も務めた信達軌道株式会社の信達地方の主要町村を結ぶ軽便蒸汽軌道の早期の電車化にも奮闘しました。こうして大島は大正10年の任期満了まで勤め上げました。

市民に熱望され再選　六代会頭の時代

福島市やその近隣地域の発展に多大な貢献をした大島は、昭和4年10月に二度目の福島商工会議所六代会頭に就任しました。これは福島市憲政会のリーダーとして、もう一度福島市の経済発展に寄与してもらいたいという市民の願いと、不況にあえぐ中小企業の多くの期待から実ったものでした。なぜなら大島は、一介の土工から身を起こして国鉄工事請負の旗頭として日本建設業界の重鎮となり、大正6年には東北唯一の公認競馬福島競馬倶楽部を創設したのを手始めに、衆議院議員としての政治力も大いに活かして、鉄道省福島保線事務所や農林省蚕業試験場福島支所、逓信省福島電気試験場の誘致を成し遂げるなど、福島の地方振興に力を注いだ絶大な実力者だったからです。国有鉄道福島～川俣線の増発と乗り合いバスの運行について国有鉄道と県知事宛の陳情をしたり、営業収益税および所得税を軽減して営業不振を立て直せるよう仙台税務監督局宛に嘆願しました。また、日本放送協会と主催で共同ラジオ博覧会を開催し、福島の経済活性にも努めました。特筆すべきは、秋田銀行福島支店の誘致に成功したことです。なぜなら金融恐慌の結果、福島市内の地元銀行がのきなみ破綻してしまい、市内所在の銀行が日本銀行以外は安田銀行福島支店と県農工銀行の二行になってしまったため、商工業者が取引に多大な不便を感じており、打開するためには誘致が欠かせませんでした。

大島要三の最期

大島は会議所会頭であった昭和6年4月19日に、福島市より功労者として表彰を受けました。しかし翌年の昭和7年1月に発病、東京の病院に入院しますが、3月23日に74歳で逝去しました。福島市公会堂で1万有余の市民に見送られながら、かつてない盛葬な告別式が営まれ、福島市のシンボルである信夫山の墓所に葬られました。名実ともに福島を墳墓の地とした大島は、福島市に数えきれないほどの足跡を残したのです。

福島競馬場と大島要三

福島競馬場は日本中央競馬会(JRA)が公認し運営している東北で唯一の競馬場です。全国から競馬ファンが集うほか、イベント会場としても利用され、市民にも大変親しまれている施設です。かつて、様々な苦難を乗り越え、開設に至った最大の功労者が大島要三、その人です。

競馬の発祥

そもそも福島における競馬の発端は明治20年、信夫山の麓(現在の県立橘高校裏側)にできた一周約800メートルの競馬場であり、春・秋の2回に渡って行われた信夫山招魂社(現在の福島県護国神社)祭礼の奉納競馬でした。これが大盛況で、「一等に入った馬の持ち主である商人が狂喜のあまり札束を場内にばら撒いた。」という逸話が残されています。初めは大いに盛り上がりを見せた競馬でしたが、明治30年のレースを最後に競馬場は郡山市開成山へと移転しました。

競馬の推奨

同じころ、迫る戦争に備えるため陸軍による軍馬改良が急務となり、政府は馬政局を創立し産馬事業促進に乗り出しました。この時、軍馬改良の手段として競馬が注目されました。馬を走らせ優劣を付けることにより、国内における産馬事業の関心を高めようとしたのです。さらに、馬券を発行することによって資金を得ようと考えた政府はこれを奨励しました。

競馬熱の高騰

そして明治39年に競馬法が施行されると各地から公認競馬の認可を求める請願が出され、横浜を始め、京都、札幌、藤枝など全国15カ所に公認競馬場が設けられました。すると競馬熱は一気に盛り上がり、公認ではない郡山市の開成山競馬場ですらそれらと一切引けを取らず、郡山市内は競馬景気に沸き立ったのだそうです。全国的にそのような異常な競馬熱に包まれたため、すぐに社会問題となりました。明治41年には馬券禁止令が発令されましたが、政府は、産馬事業の目的で推奨した競馬を廃絶させるわけにはいかず、馬券を伴わない競馬開催の維持を目的にわずかな補助金を支出することにしたのです。補助金競馬と呼ばれる形の始まりでした。

福島愛馬会の結成

大正2年、安達郡産馬畜産組合長であった伊藤弥らの主張により、「馬産振興、乗馬奨励、競馬発展に寄与」を目的とする「福島愛馬会」が結成されました。伊藤は当時の日本の政権を担っていた政友会所属の政治家で、馬を愛し、彼こそ福島市に公認競馬場の誘致を唱えた人物でした。

福島競馬場開設への第一歩

大正5年、静岡の藤枝競馬倶楽部が経営困難に陥り、相談によっては開催権の譲渡が可能であるという情報が入りました。競馬場誘致を掲げていた伊藤にとっては喉から手が出るほど欲しい情報であったに違いありません。当初は郡山市の開成山競馬場を公認競馬場にするという方針で進められましたが、郡山市民たちが首を縦に振ることはありませんでした。彼らにしてみれば、競馬場の誘致など「倒産した事業を押し付けられる」という行為にすぎなかったのです。遂には新たな競馬場を福島市に求めることとなりました。

大島要三への嘆願

福島市には福島県政財界の重鎮、大島要三が腰を据えていました。大島は伊藤が所属する政友会と敵対する憲政会に所属する政敵で、当時の情勢を考えれば彼らが手を組むことは考えられません。しかし、本宮市出身の伊藤では、福島市内に競馬場建設を働きかけるには限界があります。そこで影響力を持つ大島の協力を得ようと考え、彼に嘆願しました。伊藤の熱意に大島が感嘆、これを快諾しました。そして大正6年、公認競馬場誘致に向けて本格的な活動が始まるのです。

藤枝競馬場の買収

大島は先ず、藤枝競馬場との交渉を試みました。その時、藤枝側が開催権譲渡に示した金額は5万(現在の約4600万)円に対し、大島が考えていた金額は1万8000円と大きな誤差があり、当然のことながら交渉は決裂しました。しかし、立ち行かない事業を抱えた藤枝側が折れてくれると踏んでいた大島は福島に戻らず、近くの温泉場に滞在し、身体を休めていました。その予想通り、5日後には藤枝側から再交渉の申し出があり、こちら側が提示した金額で交渉が成立しました。

福島競馬倶楽部

開催権の譲渡と政府から認可を得られるかどうかは別問題であり、これには中央政界に名が轟く河野広中や堀切善兵衛らも尽力し、陸軍省馬政局から内諾を取り付けて、大正6年12月27日、遂に藤枝から福島への移転許可が下りました。これにより翌大正7年1月12日、藤枝競馬倶楽部は大島が会頭を務める福島競馬倶楽部と改称しました。そして今日まで続く福島競馬がスタートしたのです。

建設まで

競馬場建設の第一候補地として挙げられたのは福島市笹木野でした。しかし地主からの反対を受け断念せざるを得ませんでした。候補地は次第に福島市腰浜町へ絞られて行き、本格的な建設工事に着工したのは3月20日のことでした。かくして、大島自ら指揮を執り、県内の土木、建築業者を総動員しての突貫工事が始まりました。過去に、難しいとされた東北本線鉄道敷設、道路建設工事などをこなした功績のある大島の力量が存分に示された舞台でした。

第1回競馬開催

大正7年6月27日、第1回福島競馬が開催されました。競馬場が完成したのはわずか4日前の6月24日でした。競馬開催時期に間に合わせようと奮闘した大工事でしたが、わずか3か月程度で馬場の造形、きゅう舎、スタンド、その他の施設などを併せた大きな競馬場を創設し、競馬開催に至らしめたのは大島の手腕の成せる業でした。その日は朝早くから多くの人波が出来上がったばかりの競馬場に押し寄せ、大盛況のうちに開幕されました。その光景は今と変わりません。

現在、福島競馬場といえば賞レースが開催され、競馬ファンにはたまらない場所となりました。春・夏・秋の3回行われるレースの際には福島市内は全国からの競馬ファンが集い、熱狂します。大島が尽力し、育て上げた福島競馬場は福島に大きな発展をもたらしました。それは、現在にも生き続け、「市民の憩いの場」「競馬ファンの聖地」として全国に愛されています。

福島競馬場 勝見浩二場長にインタビュー

昭和35年生まれ　千葉県出身。
昭和60年日本中央競馬会入会。
阪神競馬場、美浦トレーニング・センター、本部のお客様事業部、施設部などを経て、平成28年3月福島競馬場 場長に就任。

福島競馬場に就任されたのは平成28年3月ですが、JRA入会当時から競馬開催の手伝いなどで頻繁に福島市を訪れておられました。古いスタンドの時代からですので、福島には馴染みがあるそうです。

Q では、そんな場長にお聞きします 福島の印象はいかがですか?

30年前からそうでしたが、競馬場が街に近く、駅周辺にまとまった繁華街があり、分かりやすく親しみやすい印象でした。街の中は道路拡張などで以前と比べて広くきれいになりましたが、福島の人たちは変わらずに単に優しいだけでなく、小さいことにこだわらない心に余裕のある人たちが多いというような好印象を当時から持っています。

Q 地元との関わり、福島競馬場の役割についてどう思われますか?

福島競馬場は大島要三氏の尽力によって、行政・民間が手を組んで誘致した過去の経緯から、競馬場の存在が街に馴染んでいるのだと思います。競馬は本来、馬券を購入してギャンブルとして楽しむものです。ただ、それだけではなく競馬場に来ればプラスアルファの付加価値がありますので、多くの方に足を運んでいただきたいですね。競馬場は、競馬ファンに楽しんでいただく場所、初めて馬に触れ合える場所として、多くの方に親しんでいただくことが使命の一つでもあります。特に競馬開催では、各種イベントなども用意していますので、たくさんの方に楽しんでいただいて、地元に根差した存在であり続けること、それが福島市の発展にもつながっていくと考えています。

Q 大島要三について

こちらに来てから様々な文献等をみて、福島競馬場の成り立ちを学びました。ことあるごとに大島要三氏の名前は出てきますし、競馬を行う権利をこの地に持ってきた最大の功労者です。初代FKC(福島競馬倶楽部)会頭で今もなお競馬場のコースの一角の斜面に「FKC」と刈り込んだ植栽があります。馬場を作り直したときも、新たに造り直して大切に守っていることから、大島要三氏の功績の大きさが伺えます。他の競馬場ではこのような例はありません。この植栽は今後も大切にして残していきたいですね。

Q 福島競馬場に赴任して、一番印象に残った出来事を教えてください

今年デビューした話題の女性騎手、藤田菜七子騎手が福島競馬場で初勝利を挙げた時ですね。彼女は地方競馬では勝っていましたが、中央競馬ではなかなか勝利を挙げられずにいましたから。4月の福島競馬で初勝利を挙げた彼女に、場長として記念品を贈呈したことが印象に残っています。

Q 座右の銘があれば教えてください

座右の銘…というよりも、好きな言葉は「やる気のある者は手段を探し、ない者は言い訳を探す」これはアラブの格言らしいのですが、感銘を受けました。自分に言い聞かせることはもちろん、他人を見定める基準の一つにもなりますし、自分にも他人にも戒めになる言葉です。

Q 福島競馬場の将来像について

一番大切なことは、地域を含め、行政、各企業から信頼される競馬場であり続けることです。年3回春夏秋の開催については公正で確実な開催を行うと共に興趣あふれる競馬を提供することで、信頼を維持しつつ、将来に渡って地域とのかかわりをより緊密にしていきたいですね。

Q 競馬場でのイベント予定、または、開催してみたいイベントはありますか?

福島競馬場は平成30年に開設100周年を迎えます。それにふさわしい、今まで以上に楽しめるイベント、記念イベントの開催に向けて今から構想を練っているところです。「福島競馬場100周年」を周知するため、来年からも「プレ100周年」として取り組んでいきたい。せっかくの100周年ですから、歴史や生い立ちのようなものの展示も行いたいですね。

Q 福島市の観光PRキャラクター「ももりん」はご存じですか?

イベントなどに出てきますよね。競馬場に来てもらったことは…私が就任してからは無かったように思います。JRAにもターフィーくんという馬の可愛いキャラクターがいるので、今度ぜひツーショットを見たいですね。

©JRA

Q UMAJO(=ウマジョ:女性にも競馬を楽しんでもらうための企画)の評判は?

福島競馬場ではスタンドの一角に専用のUMAJO SPOTを設けており、そこでは美味しいスイーツやドリンクも用意しています。また、ゴール目前の一番良い席にUMAJOシートを設置していて、迫力あるレースが優先的に楽しめます。競馬場は女性だけでなかなか入りにくい雰囲気もあると思うので、UMAJOをきっかけに来場してほしいですね。評判も上々で、来場した女性たちにはとても喜んでいただいています。